

修辞学

香西 秀信

外山滋比古の『修辞的残像』は、本人が修辞学とは何の関係もないと明言しているのも関わらず、「修辞」という題名が付いているだけで、修辞学の研究に分類されることがある。修辞学やレトリックは、そういう風に、実際の内容とは無関係に、ただその言葉だけが、単なる表現分析の論文の題名にしばしば使用される。だが、修辞学(レトリック)とは、論理学と同様に、独自の歴史的発展による体系を備えた固有の学問の名称であり、表現分析を扱っておれば何でもその名で呼べるといったものではない。したがってここでは、やや厳格に、rhetoricという学問で蓄積された技法、方法に関わる研究だけを扱うことにする。

第一に、われわれは、森雄一の『学びのエクササイズ レトリック』(ひつじ書房)に注目しよう。これは、大学生向けのレトリックの教科書であるが、【研究動向】欄で取り上げるに足るほどの、独創的な意匠に満ちた労作である。例えば著者は提喩研究の第一人者なので、おそらく提喩に相当のスペースを割いて、高度の議論を展開しているのではないかと予想されるであろう。だが、実際には、提喩は、直喩、隠喩とセットにされて、ただ一章の中に押し込まれているにすぎない。その代わりに、換喩が独立した一章を与えられ、理論的にやや深く論じられている。これは、森の教科書が、大学での教授経験から出来上がったことをよく示している。私も何年か大学で比喩について教

えたことがあるが、学生が最も興味を示し、面白がるのが換喩なのだ。さらに、比喩を教えるにしても、いきなり用語から入るのではなく、われわれの言語がいかかに比喩に満ちているかの説明から始め、比喩の効能に進み、比喩とことわざに回り道した後、四章になってやっと直喩や隠喩という用語とその定義が教えられる。著者の狙いが、知識の習得ではなく、「レトリック感覚」の育成にあることがよくわかる組み立てである。

第二に、やや変則であるが、山口誠一訳著と銘打たれた『ニーチェ『古代レトリック講義』訳解』(知泉書院)はどうしても取り上げなくてはならない。これだけの翻訳と解説は、第一級の「研究」である。本書の原典は、ニーチェが1872 - 73年に、バーゼル大学でたった二人の学生を相手に行った講義の草稿をまとめたものである。私は以前にSander L. Gilmanらの編集したテキストで読もうとして、あまりの詰まらなさに途中で投げ出してしまったことがあるが、今回翻訳で読んで、やはり詰まらなかった。はっきり言って、無味乾燥の極致である。だが、この講義録は読者には利益をもたらさないかもしれないが、ニーチェには大いに役に立った。彼はこの講義の準備をしていて、言語が本質的に比喩であり、したがって言語によって真理は表現・伝達できないという思想を獲得したのである。ニーチェの思想が形成されるドラマは、全十六章のうち、わずか一章で展開されるにすぎないが、それだけでも本書を購入する価値はある。読めばほんの少しだけ感動する。

(宇都宮大学)